

# 少年少女にとって文芸とは何だったのか

## ——1900～10年代の『日本少年』『少女の友』投稿欄比較から——

今田絵里香（京都大学）

### 1. はじめに

本報告は、1900～10年代の『日本少年』『少女の友』投稿欄を比較し、中学校・高等女学校に進学した階層の男子／女子にとって、文芸作品を雑誌に投稿するということがどのような意味があったのか、またその意味は時代によってどのように変遷していったのかを解き明かすものである。

### 2. 『日本少年』と『少女の友』

1877年に創刊された作文投稿雑誌『穎才新誌』（製紙分社、1877年3月10日～1901・1902年？）は、作文投稿熱を背景にして、大きな人気を得ていた。『穎才新誌』廃刊後、1900年前後に創刊された複数の少年少女雑誌が、作文投稿欄を設け、引き続き投稿熱を煽っていった。なかでも投稿欄の充実を盛んに宣伝し、講読数を飛躍的に伸ばしていったのが実業之日本社の少年少女雑誌である。

同社の少年雑誌『日本少年』は1906年1月に創刊される。2年後、1908年2月に少女雑誌『少女の友』が創刊される。どちらも読者の投稿による通信欄・文芸欄を設け、投稿少年／少女の絶大な支持を得ていた。たとえば、『日本少年』1910年1月号の作文投稿数は2万19通に上ったといわれている。

とりわけ1910年代は『日本少年』の黄金時代にあたる。少年詩で一躍人気を博した有本芳水を編集陣に迎え入れ、先行雑誌『少年世界』（博文館）、後続雑誌『少年倶楽部』（大日本雄弁会講談社）を凌いで少年雑誌界の頂点に輝いていた。実際、『日本少年』では、1912年1月号を12万部発行し、少年雑誌界における最高発行部数記録を更新したと豪語している。その後、記録は次々と更新され、1912年1月号は15万部、1913年1月号は25万部、1919年1月号は35万部を発行することとなる。したがって、1910年代とそこに至る1906～09年を分析することで、投稿欄充実を打ち出して人気を得た『日本少年』と、それを支えた投稿少年たちの文芸への思いを汲み取ることができると考えられる。また同時代の『少女の友』と比較することで、少年と少女における文芸への意味づけ

の違いを明らかにすることができる。

### 3. 投稿熱と剽窃

1919年までの『日本少年』『少女の友』では、文芸作品が掲載されることが非常に名誉なことであると考えられていた。

文芸作品の選をし、手本となる自作の散文・韻文を掲載する編集者は、「先生」として読者の尊敬を集めていた。編集者は編集者であると同時に、雅号を持つ作家でもあった。またかつての投稿少年でもあった。

しかし、投稿作品の掲載が名誉であるからこそ、他の作品を剽窃する者が跡を絶たなかった。投稿欄では毎号のように編集者が苦言を呈している。読者のほうでも他者の剽窃を報告するとともに、厳しく批判している。

記者も最う決する処があるのです。既に今回も聡明なる誌友諸君から通告された剽窃者が十七名ありました。其十七名は只だ記者のノートに記したのみで、誌上にはわざと名を掲げません。名を掲げないのは記者が汚れたる少年に対してまだ幾分の同情を持つて居るからです。併し、一度記者のノートに記された者の投書は、其者から正直な弁解若しくは立派な懺悔のない以上、今後永久本誌上に掲載せぬことに致しました。（『日本少年』1907年3月号）

### 4. 「少年／少女らしさ」を表現すること

編集者は、剽窃を憎むとともに、定型を学び定型を操るといふこれまでの作文のあり方を見直し、少年少女が自分の言葉を用いて自分の考えを表現することが大切であると考えていた。そのように徹底して「自分らしさ」、すなわち編集者にとっての「少年／少女らしさ」を表現すれば、他者の作品を模倣することがなくなるため、剽窃が根絶できると考えていた。

作文も和歌も俳句も総て、自分の眼で見、自分の頭で考へた物でなければいけません。嘘を書く事と、他人の作を盗む事とは、日本少年たるものゝ

最も恥辱とすべき事で、記者は、世の中にこれ程嫌いな事はありません。(『投稿注意』『日本少年』1906年2月号)

そもそも作文投稿雑誌『穎才新誌』では定型文を学び定型文を操ることが基本として考えられていた。文体においても漢文訓読体が作品のほとんどを占めていた。しかし『日本少年』『少女の友』ではそのような文芸のありかたを否定する。投稿作文を見ると、半数は文語体であるが、残りの半数は口語体である。とくに漢詩文を学ぶ機会が少なかった『少女の友』の読者たちは積極的に口語体を用いて作文を投稿している。編集者においても韻文以外に文語体を用いることはなく、なるべく平易な言葉で記事を書くように努めている。

### 5. 少年詩の人気

ところが、1910年に入ると『日本少年』に変化が訪れる。同年5月に有本芳水が実業之日本社に入社し、1912年1月に編集長(主筆の補佐)、同年12月に主筆になると、編集者が文語体の散文・韻文を掲載するようになる。また読者投稿欄においてもそれを模倣するものが増加する。

それまで実業之日本社の編集者のほとんどが早稲田大学英文科の卒業生であった。その一人である岩下小葉が「学校時代から日本の小アンダーセンといはれてみた」(滝沢素水「ダンワクラブ小葉君を紹介す」『日本少年』1910年6月号)と紹介されていることから推測できるように、西欧の児童文学に影響を受けている編集者がほとんどであった。しかし有本芳水はただ一人「早稲田大学国語漢文科出の秀才で、芳水の二字は、久しく日本の新詩壇に重きをなしてゐる」(滝沢素水「ダンワクラブ 芳水君を紹介す」『日本少年』1910年5月号)と紹介された。芳水は国語漢文科で学び、新体詩、すなわち文語定型詩の名手として知られていた。また熱心な詩歌の投稿少年でもあった。

芳水が『日本少年』に新体詩を掲載すると、たちまちのうちに通信欄のほとんどが芳水の新体詩に心酔する投書で埋め尽くされた。そして通信欄・文芸欄には芳水の作品を模倣する作文が大量に掲載されるようになった。

芳水の作品における最大の特徴は「悲哀」である。たとえば芳水の少年小説は本人によって「悲哀小説」と名づけられている。このような「悲哀」を込めた作品が掲載されるとともに、読者の手によって模倣され、掲載されるようになった。

身に沁むやうな草の香の漂うてゐるさみどりの木かげに私は身を投げて芳水詩集を読みました。春の日影は木の間を洩れて美しう私の頬に動きまゐります。赤い煉瓦のスクールの裏の小山の森では小鳥が春を惜しんでかキツキ啼きました。(略)ただわけもなく湧きいでた熱い涙が、表紙絵にホロホロとこぼれました。(『日本少年』1915年6月号)

このような芳水の新体詩は「少年詩」といわれ、その人気によって『日本少年』は部数を拡大していったのであった。

### 6. 「悲哀」をめぐる

しかし、第一次世界大戦が開始されるとともに、「悲哀」が「少年らし」くないとして、通信欄で否定されるようになった。芳水自身、「悲哀」は少年に似つかわしくないとして、批判するようになる。

投書の秘訣もさうです。少年らしくの一語に尽きます。(略)和歌などではことに大人の真似が多いので困ります。少年にもいろいろ悲しい事があります。然し少年時代と云ふものは、悲しい事も左程自覚して悲しいとは思はないものです。然るに涙と悲哀と頹廢の気分を賛美する歌の多いのは実に意外であります。

少年には大人の許されない靈感があります。宇宙の神秘は却つて純な少年によつて直覺されるものです。決して大人の真似をするには及びません。若し少年の仮面を被り、賞品を目的に、投書をする様な人があつたらば我日本少年の文壇を冒瀆するものとして極力排斥せねばなりません。(『談話倶楽部』『日本少年』1918年4月号)

1919年8月号を最後に芳水は『実業之日本』の編集局に異動になり、代わりに主筆となった渋谷青花は、「悲哀」の込められた通信を一切載せることがなかった。

### 7. おわりに

1906～1919年の『日本少年』『少女の友』においては、文芸作品が少年少女雑誌に掲載されることがたいへんな名誉であった。しかし、少年においては文芸作品のテーマ/文体と「少年らしさ」の一致・不一致が常に議論されていった。それによって、文芸そのものと「少年らしさ」の接合が、時代が下がるにつれて揺さぶられていった。